

長崎：映画事始め 芝居小屋から活動写真館へ その3

著者	山川 欣也
雑誌名	長崎外大論叢
号	25
ページ	177-196
発行年	2021-12-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000804/



*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.25 2021*

長崎：映画事始め
— 芝居小屋から活動写真館へ その3 —

山川 欣也

Early Movie Theatres in Nagasaki (3)

YAMAKAWA Kinya

長崎外大論叢

第25号
(別冊)

長崎外国語大学
2021年12月

【研究ノート】

長崎：映画事始め
— 芝居小屋から活動写真館へ その3 —

山川 欣也

Early Movie Theatres in Nagasaki (3)

YAMAKAWA Kinya

概要 (Abstract / Short Outline)

The first moving picture in Nagasaki was screened using the cinématographe method. The date and time was May 21, 1897 (Meiji 30), and the place was within the Yasaka Shrine. Though the performance of plays in showhouses (misemono-goya) had been accepted by people in Nagasaki, the number of theatrical showhouses screening movies little by little increased as movies became popular after that. Gradually, the residents of Nagasaki came to prefer movies over plays.

This essay aims to clarify how movies become established in Nagasaki as people's entertainment. This time it will be ranged from 1904 to 1905.

キーワード

芝居小屋 活動写真 長崎

はじめに

先稿に引き続き⁽¹⁾、長崎に於ける最初の映画興行が行われた1897年から最初の常設活動写真館が誕生した1910年までを対象として、映画が、娯楽として、長崎に定着していく過程を明らかにしていくことを目的とするものであるが、本稿では1904年から1905年を射程とする。

2. 1898 (明治31) 年以降の活動写真

(4) 1904 (明治37) 年 ~ 1905 (明治38) 年

本節に入る前に、まずは、前節(3)で、課題となっていた「活動写真製造主任ハンガリハアントンゼンセン米国人クンドアンコアの両氏渡来」についてわかったことを記しておきたい。唐鎌祐祥による『かごしま映画館100年史』に、「同年7月には仏国人アントン・ジャンセン、米国人アン・コーラという外国人技師による活動大写真が高千穂座で行われ、「来観者はほとんど千人に上り、紳士連も多く見受けられたり。両技師は初めに蓄音器を使い英米仏の軍歌などを奏して喝采を博した」との記載があった。1903 (明治36) 年7月9日の『鹿児島新聞』の記事による引用で、長崎での興行が6月中～下旬であり、鹿児島は7月上旬であることから、興行スケジュールとして無理がないこと、また『鎮西日報』による上記記事での外国人技師名の表記とは異なる(おそらく『鹿児島新聞』の方がより正確な表記をしていると思われる)が、おおよそ同一人物であると推測されることから、この

2人の人物は、課題となっていたエジソン社のジェームズ・H・ホワイトとフレッド・W・ブレチンデンでないことは明らかとなった。⁽²⁾

年が変わり、1904（明治37）年の正月興行は、八幡座は壮士芝居、舞鶴座は歌舞伎、栄の喜座は浄瑠璃、布袋座は身振新内というお馴染みのラインナップといったところで、栄の喜座は「新年二日より開場したる同座の竹本組太夫一座の義太夫はデン通は先刻御承知の通り自から稲荷座一派の妙ありて悉く長崎の人気に叶ひ開場以來非常の大入」であった。⁽³⁾ また、八幡座の山田重助一座の新演劇は「電気應用が呼び物にて開場以來非常の人気」で、「初日以来非常の大入を占めたる御礼として木戸錢も引下げ平場四人詰五拾錢といふ値安にしたりといへば一層の人気なるべし」と記されているほど、人々の足を芝居小屋に向けさせていたようである。⁽⁴⁾

2月に入ると、正月興行ではあまり居場所を確保できなかった活動写真が、八幡座と祇園座で興行がなされた。同時期に複数の芝居小屋で活動写真興行というのは、長崎では初めてのことであった。正月興行で評判をとった八幡座は「本日より向ふ一週間八幡座に於て開場する四大活動大寫眞は東京大坂にて非常の好評を博したる嶄新奇抜のものなりといふ」と記され、その一方、先年12月にも活動写真興行で大入をとった祇園座は「本日より一週間祇園座に於て開場の活動寫眞は曩に聯合軍戦争日露の關係を演じて大好評を得たるものにて今度は佛國最新輸入の活畫を加へ大勉強大安價にて見せるといふ」と記され、両座とも一週間興行だったようである。両座の興行の追記事がなく、不明な点が多いが、祇園座は「曩に聯合軍戦争日露の關係を演じて大好評を得たるものにて」とあり、先年からの日露關係の悪化を受けた社会状況が映し出されていることから、非常な人気であったと推察される。⁽⁵⁾ 長崎は露国との關係は長く、在ロシア総領事館が置かれていたが、この記事が載った3日後、2月5日には総領事以下総引き揚げが決定され、日本がロシアに宣戦布告した2月10日には在ロシア総領事館と海軍病院が閉鎖された。この後、過日に日清戦争や北清事変（義和団事件）の題目が評判であったように、芝居小屋で日露戦争での戦況にまつわる演し物が登場し、さらに幻燈や活動写真でも戦況実写の上映が増え始める。日露戦争実況活動写真への需要への高まりとその受容のあり方が、活動写真館創設へと興業界を揺動することになる。⁽⁶⁾

日露が戦火を交えて以降、戦時下となり、2月15日に長崎要塞地帯区域には戒厳令がしかれ、長崎駅（現在の浦上駅）をはじめ市内各地に検問所ができるのであるが、この段階では、興業だよりを見る限りにおいて、新派劇や講談はじめ、東京からの桃川若燕一座など「非常の人気」⁽⁷⁾と報ぜられ、従前と大きな差違は見当たらない。

3月に入り、16日から祇園座で興行した美當講談に、17日付で「日露戦争」なる演し物が記載されているのだが、追記事を確認できず、その講談内容は不明である。⁽⁸⁾ 24日付では「此の程より祇園座に於て開演の美當講談は毎夜札止の大入氣なるが愈々明夜限りの御名残として威海衛海戦記定遠號沈没丁提督最後の詳細を講演するといふ」とあり⁽⁹⁾、これは日露ではなく日清の戦記内容であることから、10日間程度興行をうった美當講談は日露戦争をどの程度語ったのか、語れたのか全く以て定かではない。新聞の速報性には適わないながらも、活字にはない臨場感ある語り口で観客たちにあたかも追体験させるかのような講談などの演し物は、多くの一般市民に戦況を知らしめる効果はあっただろうことから、繰り返しになるが、この時期足を運ぶ観客たちの期待はかなり大きかったと考えられる。⁽¹⁰⁾

5月に入ると11日、13日の興業便りで布袋座に「日露戦争大幻燈」と記されている。⁽¹¹⁾ しかしながら、この後、この演し物への追記事も別段見られず、新聞記事として戦況報告はもちろん記載され

るが、興業便りに日露関係の演し物が載るのは、6月21日の祇園座での「撫型軍艦日露戦争」まで1か月以上も間隔が空いてしまう。⁽¹²⁾ この時期になると次第に興行数も少なくなっていたようで、5月14日の投書欄には「今度八幡座で演る大坂青年役者の町廻りは寶惠駕で派手に遣つて呉れたので寝入った市中の景氣が引立つた様な氣がして嬉しかつた芝居も定めて大當りだらう（ヒイキ）」と載り、13日に初日を迎えた大阪青年俳優嵐吉松郎中村雁童市川樂之助一座は、最終的には7月初め迄長期滞在となった。⁽¹³⁾ 6月3日には「開場以來非常の景氣を以て迎へられ他座の閉場せしにも拘はらず日々大人氣の同座は今度請元の手を離れ獨立興業となりたる事とて役者は同の意氣込も以前に倍し大車輪にて勤むるが殊に今明日の狂言は故尾上多見藏の十八番物にして籠抜け宙乗りを三立目に見せ大詰釜入りの場の悲劇を居所返へしとして華やかな菊畑を演ずる杯毫も觀客に嫌厭の念を生せしめざる様勉むると云ば是非見るものなるべし」と報じられ、興行の請元もなく、この後1か月近く八幡座で獨立興行を行ったのである。⁽¹⁴⁾

祇園座での「撫型軍艦日露戦争」に続き、6月28日には「宗教家佐藤一來氏其他有志の發起に係る日露交戦幻燈會は今夕午後七時より八坂町の祇園座に於て開催し其揚り高は實費を除去して悉皆長崎奉公會に寄附する筈なるが幻燈の種版も最も精好なるものなりと云へば旁々入場者も多からんといふ」とある。これは翌日の興業だよりでも報じられた「活動恤兵幻燈」で、ここではハッキリと「恤兵」となっているところから、日露戦争自体を写した幻燈會ではなく日露戦争出征兵士などへの献金や寄付などを目的とした幻燈會だったと思われる。⁽¹⁵⁾ 7月10日には「●戦況報告會」として「長崎四新聞社發起にかゝる同會は昨日正午より榮の喜座に於て開會したるが折柄の炎熱も厭はず聽衆は開場前より詰掛け鶴鳴女學生徒の總見物其他各團體の見物ありて午後二時頃には満場立錐の地なき盛況を見るに至れり」との記事があり、その記事横の投書欄には「▲頃日の戦況は茫として捕捉する所なし日曜を幸ひ暑さを堪えて榮の喜座に其真相を求めんかな（號外生）」と載り、日露戦争の実戦状況の實際を知りたいとの人びとの欲望を垣間見ることができ、新聞記事のみならず講談や芝居などで様々な情報を得ているが、その情報は真実なのか、自分たちの兵士が如何に戦っているか、戦場で何が起きているかを実写で見る機会が到来する。活動写真は、珍しい何かを見せてくれる単なる「見世物」でなく、実況メディアの一部となっていくのである。ただ、戦時実況報告のいわゆるニュース映画としての認識が観る側にあったか、ひいては送り手側にもあったかどうかは疑わしいところで、戦地での実況を切り取るドキュメント（実写）としての映画と戦地での実況を再現するドキュメント（実写）としての映画との境界線は曖昧であり、まだ劇映画という概念も覚束ず、実際の出来事を伝えるニュース映画として派生して認識されるには今しばらく時間を必要としていたように思われる。⁽¹⁶⁾

7月15日には「明十六日夜より五日間榮之喜座に於て開場する活動寫眞は有名なる米国エデソン會社が率先して戦場に臨み實地を撮影したるものにして古今絶無のものなりと云へば之を見る者定めて實戦地にあるの思ひやすらし」と、いよいよ待望の日露戦争の実況活動寫眞が観られたのかといえば、戦場のどのような上映内容かは具体的な報告記事がなく不明で、おそらく、観る側の期待を下回るものであった、あるいは実況とはいえないものであったと思われる。⁽¹⁷⁾ 7月28日には、「●活動寫眞の話」として、

「・・・昨今見せて居る戦争でも手品の寫眞でも皆細工物で此細工をする裏面を書くと随分御座のさめた話もある▲其處で目下戦争寫眞として外国から輸入されて居るのは佛國製の多くて米國製は尠い併し可笑しいのは米國製の寫眞は此度の戦争でも日本最良の國柄だけに皆日本軍大勝利

に出来て居る佛國で出来たのは露國の肩を持つて何れも／＼日本が負けたやうに撮してある▲だから與行人は米國製のものを望んで居るが佛國製の品は値段が安くて数が多い所から已むを得ずそれを用ふるのでも尤も日本軍が負けたさまが際だつて見える所は原版を切取つて間に合して居る▲それから田舎廻りの戦争寫眞には北清事件の時分に出来たのを旗印だけ直した蒸返しや又は新規に出来た分でも陸戦に海軍旗を振廻して居るなど随分馬鹿々々しいものがある」⁽¹⁸⁾

との記事を載せている。榮の喜座での活動写真は「米國エデソン會社」のもので、「米國製の寫眞」は「日本鼯鼠」だとの認識があるとすれば、この際の上映で期待外れとはなりにくいと思われるが、まだ戦火が始まって数ヶ月なので、それほど実戦の場面はなく、記事にもあるように「北清事件の時分に出来たのを旗印だけ直した蒸返しや又は新規に出来た分でも陸戦に海軍旗を振廻して居るなど随分馬鹿々々しいもの」が多かったのかもしれない。判然とはしないが、「米國エデソン會社」系の日露戦争映画とのことから、日露開戦後に制作していた「鴨緑江会戦」(The Battle of the Yalu)、及び「ロシア軍と日本軍の小競り合い」(Skirmish Between Russian and Japanese Advance Guards)がすでに輸入されて、6月頃には日本で巡回興行がはじまっていた可能性は考えられる。⁽¹⁹⁾

むしろ、7月16日に開場した、前地熊本でも「好人氣」だったという、東郷司令長官を伊東文夫が演じる一座による「軍事劇」については、

「●・・・さて軍事劇と云ふのは何んなものを見せるかと二番目を待つて居るとやがて開かれたのは旅順第二回閉塞に決死隊の募集より廣瀬中佐が福井丸に乗込んで目的地に向ひ沈没に際して三たび杉野兵曹長を尋ねて敵弾に仆る、と云ふ彼の新聞雜誌で見てさえ悲絶凄絶の處を下手ならぬ腕で手一ぱいに演つて見せるのだから實に面白い加之に随分金を掛けたと聞く丈け大道具が實に能く出来て居て決死隊募集の場は元より軍艦内であるから舞臺一面を軍艦の道具とし福井丸沈没の場は舞臺前面を浪の薄布にて張り福井丸を上より釣る仕掛けにして浪のまに／＼動揺させ爆發して漸々沈没に至るまでは實に肩唾を飲む壯士劇として見物した、因に此廣瀬中佐は同座の十八番として居るから此日曜まで演じて見物と呼ぶとのことである役者銘々の藝評は今度はお預りとして一寸大体の評判までかくの如」⁽²⁰⁾

と記しており、戦地の状況を写しているかもしれないが不明瞭な真実であるかのように映る実写よりは、ハリボテでもこちらの軍事劇の方がはるかに戦地の状況が圧倒的な迫力を持って受止められたということであろう。

伊東文夫一座はこの後7月末日より「新演劇オセロ」に取組み、8月に入ると一旦「大暑中暫く休場」するが、この上演には「月末というのに一杯の人」で、それも「中流以上の観客を引き」、「西洋人の來觀も多」かったと報じられた。⁽²¹⁾

9月に入り、「從來八幡座にて興業しつゝありし伊東一座は今回英米人を加へて之を露兵に扮せしめ大に火花を散らして戦争劇をみせるといひ又今後榮の喜座へ乗込んだは御馴染の新演劇優美會一座にして先づ町廻りの服装など海陸兵にワット人氣を取り一昨日より華々敷戦争劇の初日を出したりといふが双方とも負けぬ様勉強が肝腎々々」と、八幡座(引続き伊東文夫一座)と榮の喜座で戦争劇の興業が行われ、八幡座の藝題は実にタイムリーな「前 日露戦争劈頭の快報 八幕」、「切 近世快事 遼陽の占領 二幕」であった。⁽²²⁾

9月25日、「今夜より八坂町祇園座にて開場の筈なる日露戦争活動寫眞は至極目新らしき物にて旅順口外の大海戦摩天嶺の逆襲、金州城門の破壊杯座ながら戦争の實地を視るの思ひあらしむといふ」

との記事が載った。注(6)でも記したように、日露開戦後、カメラマンとして、吉澤商店から第一軍には藤原幸三郎、博文館から第二軍には柴田常吉(北清事変時には吉澤商店から)が派遣され、また第三軍にはイギリスのアーバン社(Charles Urban Trading Company)からJ・ローゼンタール(Joseph Rosenthal)が従軍カメラマンとして派遣された。⁽²³⁾藤原は三月から九月、柴田は五月から九月にかけて従軍し、それぞれ十三本、十本の実写映画として、1905年版の吉澤商店のカタログに載った。J・ローゼンタールの実写映画は24本あり、総称して『旅順の降伏』(Siege and Surrender of Port Arthur)として、カタログの中だけではなく、唯一映像として現存している。7月13日から京都の夷谷座で藤原幸三郎撮影の実写映画が上映されたらしく(上記カタログには「大本營陸軍部御許可寫眞」とあり、写真の説明書きの日付は7月2日から始まっているので、夷谷座での上映は撮影直後になるが)、おそらくこれが日本製日露戦争実写映画の最初と考えられ、以降8月、9月の日付などもあることから、秋以降漸次公開されたように考えられる。とすれば、記事の、祇園座で上映された「旅順口外の大海戦摩天嶺の逆襲、金州城門の破壊杯」といった映画は、藤原あるいは柴田によるものも入っていたかもしれないが、やはり上映内容についての記事がなく特定できず、日露関係の海外からの輸入活動写真であったように思われる。⁽²⁴⁾

10月は、23日付けに八幡座で「日露戦争活動寫眞」とあるが、その後追記事がない。この記事の23日以降、継続して本興行がなされていたか不明だが、11月に入り、12日、13日に記事がようやく載る。12日には、「東洋活動寫眞會日露戦争は非常の好評にて毎夜立錫の餘地なきまでの好評なり就中端艇競争、火災、顕微鏡中の虫の如きは學生諸君の嚙に一覽すべき價值あるものにて兎に角從來陳腐の種類と違ひ嶄新有益士氣發展に資するもの多々なりと」と記されているが、日露戦争の実写映画がどのようなものかは明らかでなく「端艇競争」や「顕微鏡中の虫」(これは6月に京都南座での「水虫を七千五百万倍に見た顕微鏡活動寫眞」の可能性大)など多岐にわたり、「士氣發展に資するもの多々」とあることから、戦時下で「有益」で、日露はともかく戦争と無関係な上映会ではなかったといえそうである。⁽²⁵⁾

13日は、『鎮西日報』に「繪畫の鮮明と映出時間の長きと説明の上手なるが呼物にて非常の景氣なりし八幡座の東洋活動寫眞は今日打上げの筈の處更に五日間の日延べ興業を爲し新着の寫眞をさし換えて見るといふ」とあり、「非常の景氣」で延長して興行することを伝えている。また、『東洋日の出新聞』では「同座の東洋活動は繪畫の鮮明と映出時間の長きと例の駒田好洋の説明とが評判にて連日賣切れ札止の好景氣なれば今拾三日を以て打揚げ閉會なす筈なりしも更に五日間拾八日迄日延なし新著寫眞をさし加へ見する由」と記され、『鎮西日報』では「東洋活動寫眞會」としか記されていなかった(駒田巡業隊はこの頃「東洋活動寫眞會」と名乗っていたことから推測はできる)この活動写真興行が「駒田好洋」によるものであることを明らかにしている。この時期、駒田巡業隊は九州地区を巡業中で、9月が熊本の東雲座、10月は博多の雄鷹座での興行がわかっている。この後の新聞の興業のたよりは静かめで、12月17日でも、祇園座の「日露戦争うかれ節」、榮の喜座の「博多俄川丈一座」と2座を伝え閑散としているが、もうひとつ載っていて注目されるのが八幡座の「東洋活動大寫眞」で、これは九州巡業中の駒田巡業隊が長崎に再度立ち寄ったのか、それとも「東洋活動」と名乗る別部隊なのか現時点では確定できない。ただ、10月下旬から始まった「日露戦争活動寫眞」が、八幡座で11月まで継続していたとすれば、ほぼ1カ月近く上映されていたことから、可能性としては、その期間全てが駒田の東洋活動写真会ではなく、12月の「東洋活動大寫眞」の巡業隊が担っていたと

考えることもできよう。⁽²⁶⁾

1905（明治38）年、長崎における正月興行は例年と変わらない御馴染で年を迎えたが、旅順陥落の報を受けて、「●ニケ目の芝居と遊郭」の記事で、芝居小屋も遊郭も好景気に沸いていることを以下のように伝えている。

「▲三芝居の大入 三芝居と云へば江戸つ子をして猿若町の昔しを忍ばしむるが打揃ふて開場したる舞鶴、八幡、榮の喜の三座共に元日以来近頃に無き大入を占め殊に二日は逸に早く我社の報道したる旅順陥落の號外にて頓みに市中の景氣引立ち新年を祝ふ軒毎の國旗に更に満艦飾に擬する祝捷旗を引きはへて熱切なる祝意を表し彌が上に芽出度新年オツケ晴れて遊ぶ可しと袖を連ねて芝居に繰込みしかば三ケ日共大入札止めの好景氣なりし殊に本社が快報の達する毎に各座に張紙を爲して一般に周知せしめしかば其度毎に萬歳と拍手の響きは暫し鳴も止まず俳優の技藝と相俟つて兩々舞臺に花を添えしは嬉しかりし」⁽²⁷⁾

1904年（明治37）年後半は、記事で確認できる限りで、開場している座も少なくなっていた。特に舞鶴座は6月22日の「嵐徳三郎」以降、11月19日の慈善幻燈會が確認できるのみであったが、記事にある通り、正月興行では「打揃ふて開場したる舞鶴、八幡、榮の喜の三座」と記され、正月と旅順陥落の報に花を添えた形になったと言えようか。また、気分をさらに盛り上げるかの如く、1月5日には、先年11月に工事が完成した出島埋立地で、市主催の旅順陥落祝勝会が開催され、ちょうちん行列が行われ、3万人が参加した。⁽²⁸⁾

少なくとも昨年（1904）秋口までの従軍カメラマンによる少なくない数の実写映画が準備できていたのではないかと推察できる（先年10月、11月に八幡座で日露戦争映画が上映されている）が、年頭のこの時期に地方まではなかなか広く及ばなかったのであろうか、2月に入って、4日から舞鶴座で「日露戦争活動寫眞」、22日から八幡座で「日露戦争天然一色活動大寫眞」、さらに3月2日から4日まで舞鶴座での岡山孤児慈善会余興でも種々の余興に「日露戦争活動寫眞」の上映が行われるなど、日露戦争を優位に進めている日本軍の戦況を伝える実写映画を観る機会が増えてきている。⁽²⁹⁾

この後、4月に入って八幡座で「塙人リンドベーター、ウイルマーの兩氏が日本出征軍人家族救恤の特志により旅順籠城中苦心慘憺の末に撮影なしたる日露攻守戦争寫眞の幻燈大會は既記の如く昨日午後六時頃より開會されたり、寫眞にて多く世上に流布され居るは日本軍側の撮影に係りたるもののみなりしに今回中立國前記兩氏が敵軍側に在りて修羅場を奔走なし撮影なしたる中には實に意想外の慘絶痛絶を極め居るものありて看覽者の啓發参考に資するもの多しとのことにて昨夜は非常の盛會を極め各學校生徒は隊伍を組んで觀覽したり猶ほ本夜も引續き盛會ならんと思推す」⁽³⁰⁾と報じられた幻燈大會以降、6月25日の榮の喜座まで活動写真の興行便りは見当たらなくなる。日露戦争に関連する演し物にしても、活動写真によるものではなく、「一心齋旭玉一座西洋奇術と日露講談」といったように語り物へと若干挟まり、歌舞伎、浄瑠璃、義太夫などの便りがポツポツと報じられる興業界であった。特に5月の1ヵ月間の新聞は、ほぼ連合艦隊とバルチック艦隊との日本海海戦の戦況記事で占められており、5月30日の『東洋日の出新聞』2面上2段ぶち抜きで「大日本海戦 全勝 バルチック艦隊 全滅」の筆文字が載っている。恒例の市主催祝勝会（第四回長崎全市祝勝会）は6月4日午後1時から出島埋築地で開催されたが、不景氣と言われていた中、この時ばかりは、提灯行列、風頭山の篝火やら、「ピーアホール」が設置される等々、市内は祝勝ムード一色の様子であった。⁽³¹⁾

6月25日の興業だよりには「榮の喜座 活動寫眞」とのみ記され、これは不明だが、7月8日から

の榮の喜座については、「毎年来る毎に非常の好評を博する彼の駒田好洋一座の東洋活動寫眞は本年も嶄新なる戦争其他の寫眞數十番を携へて來崎し來る八日夜より榮之喜座にて興業する由なるが不相變好人氣ならん」と報じられていることから、6月の興行は駒田好洋一座とは別の巡業隊の可能性がある。今回の駒田好洋一座も「連夜好評を博し居れる」と評され人気が高いことがうかがえるが、続いて「例に依り好洋の滑稽充分の説明には小兒連の大喝采を博しつつあり」と記されており、活動写真觀客層についても言及されている。⁽³²⁾ 低年齢の活動写真通いは、この後、課題とされることになる。

8月上旬に、同じく榮の喜座で活動写真が開場するが、ここで興味深いのは、8月5日の『鎮西新報』に「●榮の喜座の活動寫眞 彌々今晚より開場尚餘興として東京歌舞伎座俳優市村羽右衛門尾上梅幸の二人道成寺を音曲のはやしにて映寫する筈」とあり、8月8日の同新聞には「日露戦争活動寫眞」と記されていることである。前者は、1900（明治33）年8月に東京歌舞伎座で興行され、日本率先活動写真会が「全国各地を巡業して歩いた」とされる「二人道成寺」の上映のことであろうが、13日が「今夜限り」だった後者の興行主は、木戸銭をごまかして長崎署に召喚された岩上茂三郎なる人物が「當時榮之喜座に於て開演中なる三府同盟活動寫眞興行人」と記されており、後者の興行主が日本率先活動写真会となっていないことから、初興行から数年の内に日本率先活動写真会から地方巡業へと派生した巡業隊なのかもしれないが、「三府同盟活動寫眞」なる巡業隊名もはっきりとしたことは不明である。⁽³³⁾

上記の活動写真興行から年末まで、『鎮西新報』、『東洋日の出新聞』双方に「活動寫眞」の四文字を見つけることができない。8月中旬から10月中旬まで、榮の喜座で博多二〇加、八幡座で壯士芝居や大阪若手歌舞伎一座、出島で曲芸などの見世物興行が行われたりしているが、興行たよりはまた閑散となっている。9月は日露戦争講和の前後で条約（調印は9月5日）をめぐる賛否記事、講和反対運動、新聞社や交番、鉄道などへの抗議活動の記事などで埋められていて、この頃社会全体が不穏であったこともあるだろう。その中で「●榮の喜座の二〇加 屈辱の講和で憤慨ばかりしておるのも能ではあるまい 一つ笑って来ようというひとのために・・・」といった記事はどれくらいであったろうか。⁽³⁴⁾

また、8月以降の興行で、終結した日露戦争実写映画をはじめ、関連する興行が増えるかと思われるが、上記のように上映興行は確認できず、では活動写真以外の日露戦争の演し物が次から次へ、というわけでもなかった。記事では、10月に出島埋築地で行われた「旅順包圍軍大パノラマ」、10月から興行を行った榮の喜座の伊東文夫一座による11月の「バルチック艦隊轟沈 二場」なる演題、いまひとつは11月の八幡座での美當一調講談による「日露戦争」を確認することができる。⁽³⁵⁾ 10月17日、長崎に布かれていた戒嚴令が解除され、10月だけでも英国艦隊が入港したり、捕虜引き取りのためにロシア露軍艦と運送船が来港したり、少しずつ港湾都市の平常時に戻りつつあった。⁽³⁶⁾ 11月の天長節の市中を伝える『鎮西日報』も『東洋日の出新聞』も、人出の盛況を報じており、榮の喜座では「割るゝばかりの大入にて、役者が花道の客を押分けて出たり、樂隊部屋が撤回されて客席に替ると云ふにても其盛況は知られたり、定員の超過には寛大の眼を瞑むられた、其筋の計ひには請元たる者感銘すべき」⁽³⁷⁾ であり、「午後四時頃に至りては早や身動きもならざる如ふの大入にて今日一日にて興行中の損失は取戻」したのではないかと記している。他の「八幡座市川一座の歌舞伎劇、祇園座の娘身振り、埋立地のパノラマ等は孰れも札留或いは満員謝絶の札を揚たる大景況」だと報じ、戦時下から

抜け出したことも手伝い、こうした行事などのハレの日には長崎人士たちの身動きは軽い事ことがわかるとしようか。⁽³⁸⁾

11月から年末にかけても開いている小屋は多くないが、祇園座で市川團四郎中村藤藏一座、栄の喜座では大阪文楽座竹本つばめ太夫一座、その先で望月正義一座、など旧劇、新劇問わず開演され、それでも役者により、また藝題によって人気を博したり、人出の好景気に湧くことも多いことは従前のとおりである。

ただ、11月に八幡座で開演した美當講談には、かなり厳しい評が載せられた。これまで、何度も来崎し、例えば、日清戦争や北清事変などの戦況物を語り、その人気と評価は高かった筈であるが、『東洋日の出新聞』は11月25日から三回にわたり（本題は三回目）「美當講談を聴きて」と題してその評を載せた。その日露戦争講談について、

「…此夜は閉塞隊の出發前後の光景で旗艦三笠の士官室に東郷大將と閉塞の勇士が訣別する處であつた、崇高なる處雄大なる處、其處に何等の趣を發見する事は出來無かつた、身其場に臨んで居ると云ふような感想も起こらなかつた、……嗚呼！之が九州に名高き美當一調と云ふ講談師か？斯の如くんば其説話に於ても其音聲に於ても浪花節の名人辰丸の後にだも及ばぬこと遠し！是を亦た難有がツてワイ／＼詰掛ける長崎の人は矢張娛樂に對する趣味の撰擇も甚だ低いものであると飛んだ處で發明したのである、……」

と、美當一調の講談は「『講談』ではない『浪花節』である」とし、「彼が人を吸引する處の伎兩」は「藝術の上に於ける伎兩ではない興行上の伎兩である」と決めつけ、さらには、かかる講談師を許容したその観客まで批判するに及んだ。⁽³⁹⁾ この批評への判断は出来ないが、長崎の人びとが芝居興行好きであること自体は間違いない。興行に関する新聞記事にしても、注目されるあるいは人気の高い興行については記事の枠をかなりとって、また数日間にわたって連載記事を記すなどかなり手厚いとも言える取扱いをしていると言え、また若干弱そうな演し物をプッシュするような記事さえ見える。これに比して、活動写真の興行については、ほぼ紹介に終わってしまっており、芝居興行のような詳らかにする内容記事あるいは評のような記事は皆無と言ってよく、活動写真への信頼性のようなものがまだなく、珍奇な見世物といった認識でしかなかったように思われる。ただ、一般的には、この2年にわたる日露戦争前後で、その珍奇な見世物といった殻を破り始める。

倉田によれば、12月、京都の南座で恒例の顔見世が行われたが、「不入りで、十五日興行が十二日しか打て」ず、東西いずれの演劇界も深刻な不況に襲われ、劇場は経営難に直面していたという。劇界は古い作品を繰り返し上演することに観客が見飽きてしまったことが大きな要因だとされ、人気を得ていた新劇も興行の度に新しい脚本を準備する必要に迫られていた。⁽⁴⁰⁾ 同様のことは活動写真にも当てはまり、「只写真が動くに過ぎないぢあないか」といった段階から進んだとは言えず、いくつかの巡業隊が短期間の上映会で目先を変えながら各地を巡回する状況であり、日本では実写映画はともかくオリジナルの劇映画はまだ先で、また輸入物の映画が多く、その本数はようやく蓄積されてきたばかりであったが、この年の2月に、1903（明治36）年に最初の常設活動写真館として誕生した電気館を吉澤商店が直営館にするなど、活動写真興業界は着実に活況し始めていた。⁽⁴¹⁾

1905年の後半、長崎では活動写真の上映がほほない状況で、日露戦争前後で活動写真の歴史的流れが大きく変化した、あるいは明らかに活況づいたといえないが、例えば、名古屋では、日清戦争時に新派劇が旧劇つまり歌舞伎に取って代わって隆盛したように、日露戦争が映画が新派劇を凌駕し隆盛

する契機となったとされ、名古屋に陸軍第三師団が配置されていたこともあるが、「日露戦争実写映画は末広座・御園座・新守座などの各劇場で約二年間ほぼ間断なく上映され」、その後映画人気は更に高まり、1907（明治40）年9月の上映会では「初日の入場者が二千六百三十人に達し映画でこれほどの入りを見せたのははじめてのこと」であった。⁽⁴²⁾

では、長崎の活動写真事情は、1906（明治39年）に入っても、いぜん芝居最頂の状態は変わらないのであろうか。昨年（明治38年）の正月興行では、不明な活動写真が祇園座で開演されたようであったが、1906年の正月興行では、見出しだけの御座なりの記事ではなく、少なくとも「▽布袋座 都花連娘義太夫竹本團之助一座で開場す」に比して、

「▽祇園座 帝國活動寫眞會にて開場す同會の活動寫眞は歐米直輸入に係る最新大形のものにして本年初夏京坂地方に於て非常の喝采を博し後清國武昌府に渡り張之洞の僱賛を受け上海にて開演中過日の暴動起りたる爲め中止なし當地に引上げ來りたるものにて慥かに一見すべきの價値ありと」⁽⁴³⁾

と記され、紹介字数自体は越えているうえに、いくつかの映画題名まで載せた広告がうたれる。記事ではなく、長崎での映画上映広告がでるのは、慈善会は除いてこれまで全くと言って良いほど例がなく、1897（明治30）年5月の八坂神社における長崎最初の上映会以来のことであった。

（未了）

注

- (1) 拙稿「長崎：映画事始め - 芝居小屋から活動写真館へ その2 -」『長崎外大論叢』、第23号、2019年、121-136頁。引き続き、記述の参照資料としては、当時発刊されていた『鎮西日報』を主として、これに加え、『東洋日の出新聞』、『長崎新聞』、『九州日の出新聞』、『長崎新報』を可能な限り併行参照する。また、当時長崎で発刊されていた英字新聞Nagasaki Press（1897～）も必要に応じて参照する。かかる新聞閲覧については、長崎歴史文化博物館収蔵のものを利用していただいている。記して感謝する次第である。なお、新聞記事は、判別しうる可能な限り原文のままの引用表記とする。
- (2) 唐鎌祐祥『かごしま映画館100年史』、南日本新聞開発センター、2017年、25頁。拙稿「長崎：映画事始め - 芝居小屋から活動写真館へ その2 -」『長崎外大論叢』、第23号、2019年、128-129頁。鹿児島の高千穂座でどのような映画が上映されたかは定かでなく、またこれら外国人技師による巡業隊がどのような系列（ヴァイタスコープ系であることは推察される）であったかははっきりしない点が残る。長崎初上映の広告文に記載された「技師シエレル氏」にしても、『明治二十三年～三十二年 私雇外国人技芸興行雑件（二）』を調べた吉田によれば、「明治三十年二月三日付で三木福輔が時の大阪府知事内海忠勝宛に提出した毛筆書きの「私雇外国人自動写真興行願」というのを読むと、佛国人ジェレルとあり、年令は二十三才、給料は一日金三円、宿所は川口古川橋佛国天主堂となっている。そのジェレルの脇にフランス語のスペルが堂々と書かれてあった」とあり、ジェレルとカタカナ書きがされているにしても、François-Constant Girelとスペルが最初から判っていれば、あれこれ勝手な呼び方、書き方がなされず、新聞や後の研究書などで少なくともジェレル（より正しくはジレルもしくはジ

レル)との共通認識はあったかもしれない。吉田智恵男「フランソワ=コンスタン・ジレルとダニエル・グリム・クロースについて」(塚田嘉信『映画史料発掘⑱』、私家版、1975年、371-377頁。)そこで、前川の『頗る非常 怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』に、「…三十六年には本人が再び日本に来ていたようだ。この年四月二十一日からの広島寿座での興行について、…」とあるのが気になる。ここでの「本人」というのは1896(明治29)年のバイタスコープ輸入時から1899(明治32)年まで日本に滞在していた技師のダニエル・G・クロース(Daniel Grim Krouse)のことであり、再来日とされる年号と時期は合うので、名前呼び間違いはあり得るのでもしやと思うのだが、いかんせんカタカナ表記が違いすぎることに、1899(明治32)年の上映広告ポスターには「技師クロース」と明記されていること、などを勘案するとやはり別人物とせざるを得ない。(前川公美夫(編著)『頗る非常 怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』、新潮社、2008年、383-386頁。)

また、ジェームズ・H・ホワイトとフレッド・W・ブレチンデンには、S.S." Gaelic" at Nagasaki/ S.S." Gaelic" Coaling at Nagasaki、なる映画がエジソン社に残されているが、これは東アジア(上海、香港)を撮影旅行し帰国する際、乗船していたS.S." Gaelic"号が長崎に立ち寄った時に撮影されたものであり、おそらく1898年4月7日が撮影日だと思われる。(1898(明治11)年『鎮西日報』、船舶彙報、4月8日付2面。)

- (3) 1904(明治37)年『鎮西日報』1月7日付3面。正月興行は芝居、見世物興行一色と言った様相だが、別の新聞では、祇園座に活動写真と記されている。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』1月5日付3面)ただし、この興行について、具体的に伝える他の記事がなく、いかなるものであったかは不明。
- (4) 1904(明治37)年『鎮西日報』1月21日付3面。栄の喜座では、正月興行の竹本組太夫一座の浄瑠璃の後、五日間という短期で、長崎慈善會による「活動写真蓄音器の慈善演藝を開催」されているが、これも様子は不明。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』1月16日付3面)
- (5) 1904(明治37)年『鎮西日報』2月2日付3面。(3)で記したように、祇園座では正月に短期だが活動写真上映が行われたようである。両座の活動写真興行について、その後記事を認めることができず、こちらも上映作品や興行状況は不明であるが、「祇園座と八幡座と競争の活動写真どつちも負けるな(二年生)」との投稿が2月5日の[投書]欄に掲載されている。八幡座は東洋活動写真會による興行で「歐米の風俗景色等を主として大に社會の風教上に注意し發聲疾走、浮出、天然色もて映出」とあり、祇園座は京都活動写真會による興行で「昨年三月も當地にて大好評を得たる由なるが今回亦もや佛國新輸入の器を以て大奮發にて大割引をなして獨仏戰爭美談其他東京角力等種々勇壯なる光景を寫し余興として美談の説明あるよし」と報じられている。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』2月2日付3面。)
- (6) 市制百年長崎年表編纂委員会『市制百年長崎年表』、長崎市役所、1989年、127-128頁。本文の通り、2月に日露戦争が始まるが、もとより、2月2日に開場する祇園座で日露戦争の実戦場面を撮影した活動写真が上映されるわけではない。日露戦争には、世界各国の映画会社がカメラマンを派遣しており、日本からも、吉澤商店が北清事変に引き続きカメラマンを派遣し、また博文館も派遣していた。彼らの実写フィルムのほとんどは現存していないが、吉澤商店(第十五版)『幻燈器械及映画並ニ活動寫真器械及附属品定價表』明治38(1905)年12月改正には、

「弊社特派第一軍從軍寫眞班技師藤原幸三郎氏等從軍」として幻燈寫眞はもちろん、活動寫眞フィルム目次のトップ「最近日露戦争之部」に相当数のタイトルが、長尺とともに定価が記されている。(入江良郎『日本映画史と吉澤商店』(牧野守編『明治期映像文献資料古典集成②』(日本映画論言説大系 第Ⅲ期 活動寫眞の草創期■22■)、ゆまに書房、2006年、751-775頁)。この時期の、日露戦争と、単なる見世物からの活動写真の脱却、機能メディアとしての活動写真、常設映画館の急増という極めて興味深い論点については、下を参照。

上田学「日露戦争と映画 実写映画を受容する観客の歴史性」、『映画と戦争 撮る欲望/見る欲望 (日本映画史叢書10)』奥村賢編、森話社、2009年、33-58頁；上田学『日本映画草創期の興行と観客 東京と京都を中心に』、早稲田大学出版部、2012年、21-53頁。佐藤忠男『日本映画史Ⅰ 1896-1940』、岩波書店、1995年、107-115頁。長崎における幕末以来の日露関係は浅からぬものがあり、上記の年表によれば、宣戦布告された2月10日にロシア総領事はフランス汽船により長崎から上海に引き揚げたが、その際長崎知事らが見送ったとある。

余談になるが、幕末以来、長崎における日露関係は浅からぬものがあり、上記年表によれば、宣戦布告された2月10日にロシア総領事はフランス汽船により長崎から上海に引き揚げたが、その際長崎知事らが見送ったとある(その2日前には、総領事の方が県庁に挨拶に出向いている)。(『市制百年長崎年表』、128頁)。また、開戦前、東アジア内の覇権争いで日露関係が国家間で悪化していた最中に、ロシアは雲仙にサナトリウムの建設を計画し(1900(明治33)年)、長崎県はこれを支援しようとしていた経緯があった。結果的には「日本政府の意向により謝絶される」(1902(明治35)年)のであるが、その関係性を表しているといえようか。詳細は以下、宮崎千穂「外国軍隊と港湾都市：明治30年前半における雲仙のロシア艦隊サナトリウム建設計画を中心に」、『スラブ研究』55、2008年、219—248頁。

- (7) 1904(明治37)年『鎮西日報』2月20日付3面。
- (8) 1904(明治37)年『鎮西日報』3月17日付3面。八幡座で「日露戦争幻燈會」、栄の喜座で一幕の「日露戦争實記」が演じられたり、情勢によりこの手の「藝題」が人気を呼ぶのみならず「大いに士気を鼓舞する」と捉えられた。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』3月20、21、23、26日付3面。)
- (9) 1904(明治37)年『鎮西日報』3月24日付3面。
- (10) 美當講談の美當一調については、倉田喜弘『明治大正の民衆娯楽』(岩波新書)、岩波書店、1980年、130—139頁。同『芝居小屋と寄席の近代「遊芸」から「文化」へ』、岩波書店、2006年、149—152頁。講談節は、歴史題材だけでなく、時事・社会・政治問題など扱うことも多く、内容や語り手によって小屋の入りも左右したようだが、あることないこと分かりやすくかみくだいて、恰も観たかのように語る講談は、この後、戦況実写映画が増え始め、その語りの実証性、史実への疑義などが問われ始めると観客の足は遠のき始めたようだ。
- (11) 1904(明治37)年『鎮西日報』5月11、13日付3面。
- (12) 1904(明治37)年『鎮西日報』6月21日付3面。「撫型軍艦日露戦争」は、「龜島傳三郎の新案工夫にかゝるものにして日艦十餘隻露艦六隻の型造艦を舞臺一面張の水槽に浮べて砲撃失火等の實景を觀客に見せしむ仕掛なりと云ふ時節柄定めし大入なるべし」とあり、模型を使って日露戦争の海戦を再現する見世物だが、これが「シネマテック」、「活動パノラマ」と呼べる程度

- のものであったかは不明。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』6月15日付3面。)[「シネマテック」、
「活動パノラマ」については、上田学「日露戦争と映画」『前掲書』、2009年、45頁；上田学『日本映画草創期の興行と観客 東京と京都を中心に』、早稲田大学出版部、2012年、35-37頁。
- (13) 1904(明治37)年『鎮西日報』5月14日付3面。この青年俳優一座の人気は高く、活動写真興行の比ではない記事の取り上げかたで、5月の興行だけでも「素人評」として5月15日から24日まで9回にわたり講評と俳優紹介の連載記事が載せられている。
- (14) 1904(明治37)年『鎮西日報』6月3日付3面。長崎で引き続き興行するにしても、他の興行先であるにしても、請元が決まっていなかったことによる独立興行であった可能性が考えられる。請元がなかなか見つからないのは、やはり戦時下ということがあるのか、歌舞音曲が控えられたのであろうか。戦地での勝利が伝えられる毎に長崎市は祝勝会を開き、9月の遼陽占領の際には、5万人が参加し、提灯行列まで行われ、新聞では、くんちの比ではない、と報じられているので、戦時下の日常での暗澹としたムードの反動なのだろう。芝居、見世物興行にも之を求めたともいえようか。
- (15) 1904(明治37)年『鎮西日報』6月28、29日付3面。
- (16) 1904(明治37)年『鎮西日報』7月10日付3面。「長崎四新聞社」とは、「長崎日報社、長崎プレス社、九州日の出社、東洋日の出社」。10日、11日に行われた戦況報告会は、余興も種々あり、その入場料は「市内軍人遺家族救助費ニ充テ」ることになっていた。また、この催しで「特筆すべきは初日より外人の來場する者頗る多く英國領事同夫人、米國領事夫人及び令嬢を筆頭に他紳士淑女等約五十名」と伝えている。また、『東洋日の出新聞』社は独自でも、25、26両日午後八時、大村町定席にて「實地の寫眞を幻燈に映し説明」する「戦局講話會」を催している。
(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』6月15日付3面。)
- (17) 1904(明治37)年『鎮西日報』7月15日付3面。
- (18) 1904(明治37)年『鎮西日報』7月28日付3面。
- (19) 注(6)参照。American Film Institute Catalog of Motion Pictures Produced in the United States : Film Beginnings, 1893-1910 Film Entries, The Scarecrow Press, 1995, p.79, p.986. Charles Musser, *The Emergence of Cinema: The American Screen to 1917*, (History of The American Cinema 1), Charles Scribner's Sons, 1990, p.359. Charles Musser, *Before the Nickelodeon: Edwin S. Porter and the Edison Manufacturing Company*, University of California Press, 1991, pp.273-4.
- 因に、「ロシア軍と日本軍の小競り合い」(Skirmish Between Russian and Japanese Advance Guards)は、アメリカ議会図書館(Library of Congress)でオンライン視聴可(<https://www.loc.gov/item/mp73120200/>) 2021年9月25日確認。
- (20) 1904(明治37)年『鎮西日報』7月23日付3面。因に、その藝題と役割は以下。
- ▲八幡座 新演劇伊東文夫一座
- | | | |
|---|-------------|----|
| 前 | サッフオ | 四場 |
| 中 | 日本かつた | |
| | ロシヤ負た 女丈夫の巻 | 四場 |
| 切 | 七十七士艦上の訣別 | 一場 |

役 割

東郷司令長官	伊東文夫
軍事探偵敷島猛	清川麗水
濱村佐保子	吾妻 潔
工學士清川讓	大山駒次二郎
女丈夫近藤をせん	梅木 實
露國參謀ニコロウ井ッチ	秋野秋美

また、7月22日にも、「●八幡座の戦争劇」として、「・・・得意の戦争劇を演ずる事とて喝采沸くが如く就中廣瀬中佐が杉の兵曹長を尋ねて敵弾に倒るゝ條の如きは實に悲絶凄絶心膽爲めに寒き思ひありとて初日以来非常の人気なりと云ふ」(1904(明治37)年『鎮西日報』7月22日付3面。)

『東洋日の出新聞』の「八幡座評判」では、

「・・・同座の特色とする所は戦争劇にて即日露戦争の實況を其儘大道具仕掛にて演じ國民の敵愾心を奮起せしむるを主とする由なり就中今日出演の『軍神廣瀬中佐』の如きは艦内水兵生活の状況と云ひ福井丸沈没の状景と云ひ其際に於ける廣瀬中佐態度等歴々現状を見るの思あらしめ徐ろ觀客をして當時を偲はしめ一昨夜の如きは海軍水兵某が感極りて泣出したるあり」

と評している。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』7月23日付3面。)

- (21) 1904(明治37)年『鎮西日報』8月1、5、25日付3面。因に、8月10日付には、舞鶴座の柿落して演じた初代市川左團次逝去(8月7日)の記事あり。
- (22) 1904(明治37)年『鎮西日報』9月20日付3面。記事の通り、敵国ロシアは英米人が演じた。

役 割

露國陸軍參謀ニコロウ井ッチ大佐	伊東
軍事探偵陸軍大尉敷島 猛	清川
ボーイ、ジョージヘーマ	太川
愛妾 近藤光子	梅木
露國陸軍中尉タイガー	英人ハーレー、ステンケン
同 同ペーア	米人エス、シャーマン
露兵ハンブルー	同 リチャード、オネイル
同軍曹ケス子ー	同 トーヴアルド、テトースセン
同 クローキー	英人サミュエル、エグロン

9月5日、午後五時の花火三発を合図として、市主催の遼陽占領祝勝会が行われた。(1904(明治37)年『東洋日の出新聞』9月5日付2面。)

- (23) 1904(明治37)年『鎮西日報』9月25日付3面。J・ローゼンタールは、いわゆるボーア戦争(Anglo-Boer War)にも派遣されている。John L. Fell, ed., *Film Before Griffith*, University of California Press, 1983, p.73, p.265.
- (24) 『旅順の降伏』については、上田『日本映画草創期の興行と観客』、27頁(表1-1)。梅屋庄吉『活動寫眞百科寶典』、三光堂、1911年、193-195頁。Stephen Herbert, *A History of Early Film*

Vol. 1, Routledge, 2000, p.287, pp.319-338. また、大傍正規「日露戦争記録映画群のカタロギング - ジョセフ・ローゼンダール撮影『旅順の降伏』の複数バージョン」、『東京国立近代美術館紀要』19号、2015年、42-65頁。吉澤商店（第十五版）『幻燈器械及映画並ニ活動寫真器械及附属品定價表』明治38（1905）年12月改正、143-155頁。立命館大学 ARC日本演劇上演年表ポータルデータベース (<https://www.dh-jac.net/db/nenpyo/>: 2021年9月26日確認)

- (25) 1904（明治37）年『鎮西日報』11月12日付3面。上田学「日露戦争と映画」『前掲書』、2009年、45頁。10月の興行は『東洋日の出新聞』によれば、「再昨日より八幡座に於て開催しつゝある萬國活動寫真會は從來陳腐の物と違ひ同會より戦地に派遣したる寫真班員が實地に臨み撮影せし物とて悉く眞に迫り覺へず奮起の情を起さしむと開會當夜より大入喝采なるも無理ならず」とあるので、新居系ヴァイタスコープによる巡回興行の可能性があり、そうすると、この10月の興行の担い手と11月の興行の担い手は明らかに異なっていると判断できる。ただ、やはり具体的な映画タイトルなどは定かではない。（1904（明治37）年『東洋日の出新聞』10月24日付3面。）
- (26) 1904（明治37）年『鎮西日報』11月13日付3面、同年『東洋日の出新聞』11月13日付3面。同年『鎮西日報』12月17日付3面。前川公美夫（編著）『前掲書』、245、359頁。
- (27) 遊郭についても「▲五花街の繁昌」との見出しで、「…丸山、寄合の兩廓、出雲、戸町さては對岸の稲佐まで平時に倍するの嫖客あり…」、さらに「旅順陥落の快報」でなお景気にわくとの見通しを記事にしている。因に、榮の喜座は「松島家松暁一座」の歌舞伎、八幡座は「三浦一座」の新演劇、祇園座は「大蝶一座仁和賀」、布袋座は「山陽亭夢樂一座うかれぶし」で、八幡座は「旅順陥落祝として觀客一人に金ぶちの杯を呈すと云」とある。1905（明治38）年『鎮西日報』1月5日付3面。

この旅順で乃木軍と戦ったロシアのステッセル將軍はじめ陸海軍將兵は帰国便を待つため、一時長崎に滞在することになり、1月10日から3月10日にかけて約1800人の將兵が長崎にやってきたとのことで、ステッセル將軍自身は夫人や部下とともに1月14日に長崎に到着し、17日に知事や市長に見送られてフランスの郵船「オーストラリア号」で上海に向かった。滞在地は稲佐・平戸小屋地区で、乃木大將から荒川知事宛に「彼等の取扱上更に一步を進めて十分の恩恵を示され候は至當と存じ候…貴地到着の上も此趣旨貫徹候様御盡力相成度希望の至に候」とのいわゆる親書が届いたとのことである。（『市制百年長崎年表』、129頁。「親書」の全文は、1905（明治38）年『東洋日の出新聞』1月15日付2面に記載。帰国の記事は、1905（明治38）年『東洋日の出新聞』1月18日付2面。）

- (28) 1904（明治37）年『鎮西日報』6月22日、11月19日付いずれも3面。1905（明治38）年『鎮西日報』1月5日付3面。ただ、舞鶴座については、この頃、慈善演藝會、慈善奉公会といった催しなどで利用されていたことが多く、1905（明治37）年正月の「市川一藏一座」の歌舞伎興行、旧正月の「日露戦争活動寫真」を終えると、いわゆる興業たよりが聞かれるのは来年の正月まで待たねばならなかった。もちろん、日露戦争状況関連の記事が多くなっていたことや記事漏れということも考えられる（例えば、2月4日の「今日の遊場所」には七楽座で「澤村源之丞」が「十八番の腕を振ふ可く」とあるが、興行だよりには見当たらない）が、舞鶴座については、駒田好洋によると、「本拠の舞鶴座も小屋をほしておくことが多く」との証言もある。（前川公

美夫（編著）

『前掲書』、187頁。）長崎市祝勝会については、『市制百年長崎年表』、129頁参照。また、『長崎談叢』には、「…その頃の事で一番忘れぬ追憶としては、何としても旅順包圍戦の消息で、軍神乃木將軍の勇猛を信賴する人々の誰もが「今日か今日か」と待ち侘びつつ、幾度か陥落占領の號外にだまされつゝ、その苦戦の程を思ひ悩んでゐたゞけに、いよ／＼一月一日降伏開城といふ吉報に接したときの喜びは、何とも形容されぬ昂奮感激そのものでありました。…」と当時の雰囲気をも市民の側から伝える回想が「戦時の追憶」として記載されており、さらに、日露戦争当時『長崎新報』記者であった人物の「日露戦時の追憶」の記述の中に、長崎が「其十年前の日清戦争時とは異なり、此日露戦争では佐世保が萬事を中心となつたので、自然長崎懸廳も大繁忙、佐世保は勿論長崎とても刻一刻繁劇の巷と化して行つた、…當時の露西亜といえは世界の大国、…戦つて果たして勝てるか、實情に暗ければ暗い程必（ママ）配が多く、國民を擧つて眞に國命を賭する悲愴の覺悟、三尺の童子までが襟を正して緊張したこと此時の如きは滅多にあるまい、佐世保長崎の兩市街を抱く我長崎懸民に於て殊に然りであつた。」とあり、只ならぬ緊張感が漂っていたことがわかる。「日露戦時の追憶」では、旅順開城後の長崎でのステッセルはじめロシア俘虜にも触れており、敵対した国どうしとはいえ、長崎とロシアとの関係性が垣間見えて興味深い。（田中英二「戦時の追憶」『長崎談叢』、1937年、44頁。；森肇「日露戦時の追憶」『同』、1937年、45-50頁（引用は47頁）。）

なお、この年、諏訪社神事は11月に行われていて、「例年ならばギツシリ鮎を詰めたる如き諏訪社頭廣馬場の人出も本年は十分の一にも達せず実に寂寞極まる有様なりし」と記されている（この後人出は増えたようであるが）（1904（明治37）年『東洋日の出新聞』11月9日付3面。）

- (29) 1905（明治38）年『鎮西日報』2月4日付3面。1905（明治38）年『東洋日の出新聞』2月22日、28日付3面。この岡山孤兒院慈善活動写真会は、3月9日大浦のパブリック・ホールでも開催されている。
- (30) 1905（明治38）年『鎮西日報』4月12日付3面。この間、「東京新橋吉津（ママ）商店にては征露の役起るや卒先私設從來寫眞班を派遣し活動寫眞及幻燈用の寫眞を撮影し廣く販賣し來りしか今回奉天及鐵嶺附近の戦況及旅順開城の實況を寫したる活動寫眞及幻燈映畫の原版到着セしを以て他の嶄新なる寫眞と共に販賣すると云ふ」と記事に記された東京新橋吉澤商店の広告が、久しぶりに『鎮西日報』4面に載っている。（1905（明治38）年『鎮西日報』5月20日付3面、4面。）なお、翌月『東洋日の出新聞』に同じ広告がうたれている。（1905（明治38）年『東洋日の出新聞』6月5日付4面。その広告は、内容説明を省き、見出しだけ記せば、以下。

「●日露戦争活動寫眞フィルム

- 活動寫眞器械
- 戦地實況幻燈映畫
- 征露實地寫眞幻燈映畫
- 幻燈器械
- 平圓盤及蠟管大聲發音器並ニレコード各種

東京新橋 吉澤商店」

- (31) 1905（明治38）年『東洋日の出新聞』5月30日付2面、6月3、5日付3面。

- (32) 1905 (明治38) 年『鎮西日報』6月25日、7月7日付3面。1905 (明治38) 年『東洋日の出新聞』7月10日付3面。
- (33) 1905 (明治38) 年『鎮西日報』8月5日、12日付3面。1905 (明治38) 年『東洋日の出新聞』8月12日付3面。8月5日付で「二人道成寺を音曲のはやしにて映寫」とあり、これは「長唄出語りをもって興を添えた」、
- 「景気をつけて弁士は柿三柵の上下、銀杏髻の鬢で口上を務め、長唄は伊十郎、六左衛門連中、余興は大声蓄音器等という騒ぎをやっている」と、初興行の歌舞伎座でもされたのと同じ興行スタイルだと考えられるので、日本率先活動写真会系であることは間違いないだろう。田中純一郎『日本映画発達史 I 活動写真時代』(中公文庫)、中央公論社、1975年、82-83頁。前川公美夫(編著)『前掲書』、334-336頁。
- (34) 1905 (明治38) 年『鎮西日報』9月5日付3面。博多二〇加には「二幕 バルチック艦隊全滅の肝玉」との演し物もあった。長崎の演劇興業界全体について、『鎮西日報』の10月14日、15日と続けて「▲長崎の演劇▽」と見出しの記事が載っている。曰く、「十五萬の人口があつて蕙の浪を打つ長崎シカモ随分通人とか粹客とか云ふ者もあり音に名高い土地でありながら一般の觀劇眼が低いのは驚くべきものである」との書き出しで始まるやや長めの記事で、「新演劇などと唱ふる輩かハムレットとかオセロなどと假名名題で脅かして見てもハムレットとは玉子焼の西洋名でオセロとは今度出来る煙草の名だらう位に思つて寄つかぬ」、芝居は「長崎人士も好きな方」としつつも、「狂言が永くて三日の外は持切れぬと云ふに至っては見功者が少い」不思議の現象が起こるよく分からないところだとして、十万人ほどの都市でも「五日以上七日以下で藝題替りを出す」に比して持切れず、
- 「芝居好きの多かるべき筈の長崎だから興行の方法さえ宜ければ…二度も三度も藏入祝をする事」は可能なのに、興行師の下手さで「梨園界が淋しく。淋しいにつれて看客も氣乗がせず…二三日でお仕舞と云ふ寸法になるので看客も損、興業師も損」と評し、「情なき世の中じやなァ」と嘆いている。(1905 (明治38) 年『鎮西日報』10月14、15日付3面。) 長崎でのすべての興行が当てはまるということではないだろうが、時に開座している小屋の数が閑散とする事もあり、こうしたどう転ぶかわからない長崎の興業事情に、呼ぶ方も呼ばれる方も二の足を踏む、といったことはあるのかもしれない。
- (35) 「旅順包圍軍大パノラマ」は、注(12)の「シネマテック」のようなものではなく、ジオラマのような見世物と推察する。
- (36) 少し先になるが、長崎とロシアとの関係を載せている記事として、
- 「●戦争前後の露人 此れは日露戦争前後の露人を市内商店に於て商賣上より觀たる話なるが開戦前迄は彼等一般に商店に入りて物品を購ふに頗る傲慢の態度に加へて兎角値切る癖ありしが今回久振りに來崎せる彼等は態度以前にに一變して温容從順正札通りにキツパリ代價を拂ふに至りたるは全く戰捷の餘徳なるべしと語り合へり」
- 「●稻佐の大景氣 露艦の水兵が稻佐に上陸を許されたので國際干係の復舊したる今日なれば此方も關係を復舊せずんばあるばかりと許り一昨々日は二百七十、一昨日も同數の連中が登樓したので稻佐の貸座敷は平和大明神さま／＼／＼」
- が興味深く、大陸を巡って対立した日露ではあつても、經濟的な側面からすれば長崎にとって

- は古くからの馴染み客には違いはないことがうかがえる。(1905(明治38)年『東洋日の出新聞』12月3日付3面。)
- (37) 1905(明治38)年『鎮西日報』11月5日付3面。
- (38) 1905(明治38)年『東洋日の出新聞』11月5日付3面。11月9日に、歓迎会委員が「英國東洋艦隊来港來港ニ際シ」て午後5時から出島埋築地で提灯行列を行うことを呼びかけている。(1905(明治38)年『東洋日の出新聞』11月5日付3面。) その提灯行列について「▲一昨晚の提灯行列は彼等も始めてのことと珍重がり行列中に混つて萬歳を連呼し提灯を打振り／＼喜んで居た」と報じている。(1905(明治38)年『東洋日の出新聞』11月11日付3面。)
- (39) 1905(明治38)年『東洋日の出新聞』11月25、26、27日付3面。
- (40) 倉田喜弘『芝居小屋と寄席の近代』、2006年、205頁。
- (41) 上田学『日本映画草創期の興行と観客』、2012年、22頁。吉澤商店は、日露戦争の実写映画の制作と興行でかなりの収益を上げ、また京都活動写真会とかパテー活動写真会と名乗って戦争映画を(「ナポレオン一代記」なる長篇も)巡業していた後の横田商会もかなり景気がよかったようである。(田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ』、1975年、115-116頁。) 1905年の時点で、劇映画としてリストアップできるのは歌舞伎演目の撮影も含めて7本程度であり、また、例えば「紅葉狩」などは広く公開されたのは1907年以降である。(朱通祥男・永田哲朗『日本劇映画総目録 - 明治32年から昭和20年まで』、日外アソシエーツ、2008年、1289頁。田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ』、1975年、78-82頁。)
- (42) 小林貞弘『新聞に見る初期日本映画史 - 名古屋という地域性をめぐって -』、学術出版会、2013年、33-34頁。
- (43) 1906(明治39)年『東洋日の出新聞』1月1日付第3部3面。

【参考資料：長崎】

- 『長崎市史 風俗編 下』、(昭和42年復刻)、1925年。
- 『長崎市制五十年史』、長崎市、1952年。
- 嘉村国男、『新長崎年表 下』、長崎文献社、1976年。
- 市制百年長崎年表編纂委員会『市制百年長崎年表』、長崎市役所、1989年。
- 長崎市史編さん委員会『新長崎市史』第3巻 近代編、2014年。
- 若浦重雄『長崎の歌舞伎 - 長崎芝居年代記 第一集』(私家版)、1980年。
- 帯谷重則『帯谷宗七伝』(私家版)、1999年。
- 長崎市史編さん委員会『新長崎市史』第3巻 近代編、2014年。

【参考文献】

- 青山貴子『遊びと学びのメディア史 錦絵・幻燈・活動写真』、東京大学出版会、2019年。
- 朱通祥男・永田哲朗『日本劇映画総目録 - 明治32年から昭和20年まで』、日外アソシエーツ、2008年。
- 石巻良夫『欧米及び日本の映画史』、プラトン社、1925年。
- 板倉史明(編著)『神戸と映画 映画館と観客の記憶』、神戸新聞総合出版センター、2019年。

- 岩本憲児『サイレントからトーキーへ 日本映画形成期の人と文化』、森話社、2007年。
- 岩本憲児（編）『日本映画の誕生』（日本映画史叢書15）、森話社、2011年。
- 上田学『日本映画草創期の興行と観客 東京と京都を中心に』、早稲田大学出版部、2012年。
- 小川佐和子『映画の胎動 一九一〇年代の比較映画史』、人文書院、2016年。
- 奥村賢（編）『映画と戦争 撮る欲望/見る欲望（日本映画史叢書10）』、森話社、2009年。
- 加藤幹郎『映画館と観客の文化史』（中公新書）、中央公論新社、2006年。
- 唐鎌祐祥『かごしま映画館100年史』、南日本新聞開発センター、2017年。
- 倉田喜弘『明治大正の民衆娯楽』（岩波新書）、岩波書店、1980年。同『芝居小屋と寄席の近代 「遊芸」から「文化」へ』、岩波書店、2006年。
- 黒沢清/四方田犬彦/吉見俊哉/李鳳宇（編）『映画史を読み直す』（映画は生きている 第2巻）、岩波書店、2010年。
- 権田保之助『活動寫眞の原理及び應用』東京内田老鶴圃、1914年。
- 権田保之助『民衆娯楽問題』同人社、1921年。
- 神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編、『神戸とシネマの一世紀』、神戸新聞総合出版センター、1998年。
- 小林貞弘『新聞に見る初期日本映画史 — 名古屋という地域性をめぐって —』、学術出版会、2013年。
- 小松弘『起源の映画』、青土社、1991年。
- 近藤和都『映画館と観客のメディア論 戦前期日本の「映画を読む/書く」という経験』（視覚文化叢書7）、青弓社、2020年。
- 札幌市教育委員会（編）『札幌と映画』（さっぽろ文庫49）、北海道新聞社、1989年。
- 佐藤忠男『日本映画史 I 1896-1940』、岩波書店、1995年。
- 高沢滋人、久保勲『とやま映画100年』、北日本新聞社、1999年。
- 高槻真樹『活動弁士の映画史 映画伝来からデジタルまで』、ALTER PRESS、
- 橘高広、『民衆娯楽の研究』、警眼社、1920年。
- 田中純一郎『日本映画発達史 I 活動写真時代』（中公文庫）、中央公論社、1975年。
- 田中純一郎『活動写真がやってきた』（中公文庫）、中央公論社、1985年。
- 田中純一郎著、本地陽彦監修、『秘録 日本の活動写真』、ワイズ出版、2004年。
- 塚田嘉信『日本映画史の研究 活動写真渡来前後の事情』、現代書館、1980年。
- 塚田嘉信『映画資料発掘 1～36』（私家版）、1970～1980年。
- 武部好伸『大阪「映画」事始め』（フィギュール彩）、彩流社、2016年。
- チャールズ・マッサー r（岩本憲児編・監訳、仁井田千絵・藤田純一訳）『エジソンとその時代』、森話社、2015年。
- 都築政昭『シネマがやってきた 日本映画事始め』、小学館、1995年。
- 東京国立近代美術館フィルムセンター『カタログ 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより』、2004年。
- 永嶺重敏『怪盗ジゴマと活動写真の時代』（新潮新書）、新潮社、2006年。
- 能間義弘『図説 福岡県映画史発掘 戦前篇』、国書刊行会、1983年。
- 筈見恒夫『映画50年史』、鱧書房、1947年。

- 藤川治水『熊本シネマ巷談』、青潮社、1978年。
- 藤木秀朗『映画観客とは何者か メディアと社会主体の近代史』、名古屋大学出版会、2019年。
- 前川公美夫（編著）『頗る非常 怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』、新潮社、2008年。
- 松浦章、笹川慶子『東洋汽船と映画』、関西大学出版部、2016年。
- 牧野守（編）『明治期映像文献資料古典集成②』（日本映画論言説大系 第三期 活動寫眞の草創期■
22■）、ゆまに書房、2006年。
- 牧野守（監）『復刻版 活動寫眞界』第1冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 活動寫眞界』第2冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 活動寫眞界』第3冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 キネマ・レコード』第I期 第一冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 キネマ・レコード』第I期 第二冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 キネマ・レコード』第I期 第三冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 キネマ・レコード』第II期 第一冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 キネマ・レコード』第II期 第二冊、国書刊行会、1999年。
- 牧野守（監）『復刻版 キネマ・レコード』第II期 第三冊、国書刊行会、1999年。
- 御園京平+みそのコレクション『活辯時代』（同時代ライブラリー）、岩波書店、1990年。
- 吉田智恵男『もう一つの映画史 活弁の時代』、時事通信社、1978年。
- 吉田喜重・山口昌男・木下直之（編）『映画伝来 シネマトグラフと〈明治の日本〉』、岩波書店、1995年。
- 四方田犬彦『日本映画史110年』（集英社新書）、集英社、2014年。
- わかこうじ『活動大寫眞始末記』、彩流社、1997年。
- 和田由美、北の映像ミュージアム『ほっかいどう映画館グラフィティ』、亜璃西社、2015年。
- 『日本映画の誕生』（講座日本映画1）、岩波書店、1985年。
- American Film Institute Catalog of Motion Pictures Produced in the United States : Film Beginnings, 1893-1910 Indexes , The Scarecrow Press, 1995.
- American Film Institute Catalog of Motion Pictures Produced in the United States : Film Beginnings, 1893-1910 Film Entries, The Scarecrow Press, 1995.
- Charles Musser, *The Emergence of Cinema: The American Screen to 1917*, (History of The American Cinema 1) , Charles Scribner's Sons, 1990.
- Charles Musser, *Before the Nickelodeon: Edwin S. Porter and the Edison Manufacturing Company*, University of California Press, 1991.
- Charles Musser, *Edison Motion Pictures, 1890-1900: An Annotated Filmography*, Smithsonian Institute Press, 1997.
- Charles Musser, with Carol Nelson, *High Class Moving Pictures: Lyman H. Howe and the Forgotten Era of Traveling Exhibition, 1880-1920*, Princeton University Press, 1991.
- John L. Fell, ed., *Film Before Griffith*, University of California Press, 1983.
- Nick Deocampo, ed., *Early Cinema in Asia*, Indiana University Press, 2017.

※本稿をまとめるにあたり、アートクエイク代表安元哲男氏には、資料提供などでたいへんお世話になりました。記して感謝申し上げる次第です。